

# 言語と哲学

池上 鎌 三

哲学は思想の躰系であるが、思想は表現を離れては成立することができない。このことは例へば思想そのものが生命の表現であるといふ点からも、又思想は自己表現的であるといふ点からも、承認されることである。ところで元來表現は何ものかを媒介として初めて成立する。その媒介となるものは何等か感性的なものでなければならぬ。即ち例へば身体であり、大理石であり、木材であり、顔料であり、音響である。併し哲学がその表現の媒介とするのは特に言語である。従つて哲学は言語を媒介とする思想の表現体系であることが出来る。思想は内なる言語であり、言語は外なる思想であるといふ考へは既にプラトンもアリストテレスも指摘したところであるが、具体的に哲学は、この内と外との媒介に依つて初めて表現され、この表現活動に依つて自己を実現するのである。それならば抑々言語とは何であるか。この点についてはこの小論文の主題として論ずべき限りではなく、此所ではその理解を前提しておくこととする。哲学が科学、宗教、芸術等々などのやうな関係を有つかといふことも亦今立入つて考へるべき場所ではないが、若し哲学が或る点に於いて芸術と密接な関係を有ち深く類似点を有することが認められるとするならば、その媒介が言語であるといふ点で哲学は芸術の中特に文学と深い関係のあることに我々は注目しなければならない。文学は勿論単に思想の体系であるのではないが、併し所謂芸術の中最も思想的なものであり、この点からして文学はむしろ哲学と芸術との中間に特殊の領域を形成す

るものと見ることさへ不可能でないであらう。このやうなことが云はれるのは哲学が文学と共に言語を媒介とする表現形態であるからにほかならない。

扱このやうに哲学の体系は言語的表現と特に密接な関係を有つものである。それならばその関係は如何なるものであらうか。先づ言語は哲学に対して、表現の媒介として手段の意味を有つてゐる。哲学は言語を媒介として自己を表現しなればならないが、そのために哲学は屢々術語として新しい造語を行ふ。例へばロドスのアンドロニコス——或はそれ以前の或るペリパトス学派の人——に由来する *metaphysica*、*コント* に依る *sociologie*、*エルンスト・ラインホルト* に依る *Erkenntnistheorie* 等々数多くあることは周知の通りである。併し新しく造語しないまでも日常用語を用ひながら一般の意味とは別に全く新しい、或は若干変様された意味を与へる場合も数多くある。*カント* が従来からあつた *dogmatisch* といふ言葉に「批判的」に對立する「独断的」の意味を与へたとか、*ヘーゲル* が *aufheben* に「止揚」の意味を与へたとか、*idée, idea, Idee* が *デカルト*、*ロック*、*カント* 等々に依り、*Dasein* が *ヘーゲル*、*ハイデッガー*、*ヤスパース* 等々に依りそれぞれ別の意味を与へられたとかいふ如きがその例である。このやうに日常用語を術語化する場合、故意に、或は無知の故に、正当なエティモロギイを無視して所謂 *フォルクスエティモロギイ* 的な解釈を与へた例も少くない。例へば *ヤーコブ・ベーメ* が *Qualität* に *Qual* の意味を含めたり、*ヘーゲル* が *Urteil* を *ursprüngliche Teilung* と解したりした如きはそれである。日常用語が哲学上の術語となるのとは逆に、哲学用語が日常化される——そして多くの場合に意味の變更を伴つて——例の甚だ多いことも改めて云ふまでもない。哲学といふ言葉そのものが既にさうであり、日本語でも止揚、契機、認識、範疇、主観、客観、世界観、方法論等々がさうである。

ところで言語が哲学の表現の媒介となると云つても、以上のやうな例は結局用語乃至単語の問題に止まつてゐる。勿論用語は哲学にとつて単に外面的關係に止まるものでなく、更に内容的な重要性をも有つてゐることは否定できない。用語そのものはどのやうにも変更できるといふ点があり、従つて所謂術語もできる限り日常的な、容易な言葉に代へるといふ

ことも或る程度までは可能であり、又必要でもある。けれども哲学乃至哲学的思索にとつて、用語は仮令手段であるとは云はれるにしても単なる道具以上の意味を有つてゐる。このことは例へばロゴスといふ言葉が単に道具的の性格を超えてギリシア的の思惟の仕方乃至内容にまで及ぼしてゐる影響を想ふだけでも明らかであらう。思想に対する言語の内容的影響は単語から更に文法に到つて一層重要なものとなつて来る。アリストテレスの論理学が単に「論理学」であるのみならず更に「形而上学」乃至「存在学」の性格を有つと同時に深く「文法論」の性格をも有つてゐることは今日周知の通りである。従つて今日所謂アリストテレス論理学として伝承發展されてゐるものが、その根柢に於いてギリシア語乃至印欧語の文法的構造の性格を有つてゐるものであることは否定できない事実である。例へば判断論に於いて“S is P”といふ形に即する場合と“SはPである”という形に即する場合とは、所論コブラの位置に聯関する思想形態に於いて厳密には異なるものがなければならぬ。十九世紀の末に所謂非人称判断乃至無主語命題（及び存在判断、否定判断）について盛んな論争が展開されたことがあり、それには多くの哲学者、論理学者、心理学者、言語学者、文法学者達が参加し、或る人々——例へばジクヴァルト、マルティ——はこの問題を文法を離れて論理的、心理学的な問題として論議すべきであるといふ意図から互に他の見地を文法的であるとして非難したのであるが、併し今我々の立場からこれを見るならば、抑々非人称判断といふ如きものを問題として採り上げること自体が仮令その間に或る種の論理学的問題が伏在してゐるにしても、根本に於いて文法的であると云はざるを得ないのである。哲学乃至論理学は屢々言語の差異を超えて超文法的、普遍的な問題を問題とすることを主張するのであり、その主張には多くの正当なものが含まれてゐるのであるが、併し現実には哲学乃至哲学的思索が言語を完全に超越することは至難乃至不可能と云はねばならない。併し言語と哲学乃至思想とはどのやうな關係を有つか、例へば両者の形態は果して並行性を有つものであるかどうかといふ如き問題は極めて困難な問題である。哲学は一面に於いて言語と密接な關係を有つと同時に言語を超える面をも有つてゐる。哲学の思想形態は必ずしも言語形式と完全に並行するものではなく、言語形式に依つて割り切つたり盛り切つたりすることのできぬ面を有つ

てゐる。のみならず両者が並行すると考へられる面に於いても、果してどの程度に、どのやうな形で並行するかといふ点に到つてはこれを厳密に規定することは屢々極めて困難である。けれども一般的に云つて言語と哲学とが、單語的にも或る密接な關係を有つてゐることは略々これを認めなければならぬであらう。

以上は要するに哲学思想の表現に於いて媒介としての言語、に對して有つ意義にほかならない。けれども言語は表現の面に於けると同時に解釈の面に於いても亦哲学に對して深い意義を有つてゐる。といふことは即ち言語乃至言語学が哲学に對して方法的意義を有つてゐるといふことである。ところで哲学に於いて方法とは先づ哲学を研究する方法である。哲学を研究する方法としての言語学的方法——特に文献学的方法——は哲学史的研究の場合に用ゐられる。例へばプラトンやアリストテレスの著作の真偽、年代の決定にこの方法が如何に多くの貢獻をしたかは周く人の知るところである。のみならずこの方法は、単に古代、中世の古典研究に對して有力であるばかりでなく、近世哲学史研究の場合——例へばカント研究の場合——に適用して有力であり、なほその適用範圍を拡大すべきことが予想されるのである。

ところで文献学的方法は右のやうに先づ哲学（史）を研究する方法として有力であるが、併し哲学的研究は單に哲学（史）を研究するのではなく、むしろ主体的に哲学が研究するのでなければならぬ。このやうな哲学そのものの主体的思索にとつて「方法」の意義は一層深くなければならない。このやうな方法は單に道具の如き意味を超えて哲学乃至哲学的思索を本質的に規定する性格を有つに到り、哲学乃至哲学的思索そのものが方法的性格を有つに到るのである。このやうな云はば哲学の主体的方法としての文献学的方法は哲学的方法として一つの特徴ある種類を形成してゐる。哲学の方法としての先驗的方法、弁証的方法、現象学的方法等々は單に哲学を研究する方法ではなく哲学が研究する方法として哲学（的思索）そのものの根本的性格を規定する意義を有つてゐるのであるが、所謂文献学的方法も亦これらと並んで同様に重要な意義を有つてゐる。

文献学の一部としての解釈学が殆んど文献學の歴史と共に古いことは改めて云ふまでもないが、それが確立されたのは

近世シュレーゲル、シュライエルマッヘル、特にベックに依つてであつた。ところでこの解釈学的方法を単に文献学的な範囲を超えて更に広く且つ深く哲学の方法として確立したのはディルタイであつた。向に哲学が研究する場合の文献学的方法と云つたのは具体的にはこの解釈学的方法である。ディルタイの所謂解釈学的方法とは文字に依る生命の表現を技術的に了解する方法の謂ひである。元来解釈といふものは解釈者と被解釈者との生が互に親近性を有つことに依存することが大であり、且つ解釈者の豊かな天分を必要とするものである。そこで単に天分や生の親近性のみ委ねるのでなく、これを技術的に容易ならしめるために解釈の方法、規則を発見するものとして解釈学を確立する必要があると考へた。ディルタイはこの解釈学的方法を以て広く歴史、芸術等に於いて表現される個别的生命の普遍妥当的解釈が可能となるとして、この方法に依つてその所謂精神科学の基礎づけを試みたのであつた。

ハイデッガーの哲学は最近に於ける解釈学的方法の代表的展開と見ることが出来る。彼の哲学は内容的には存在学であり、方法的には解釈学的現象学であるとされる。既に解釈学的現象学といふ言葉が示す通り、ハイデッガーは方法論上ディルタイとフッサールとの影響を吸収してゐることは事実である。けれどもこの場合方法と内容とを全く分離することは實際上不可能であり、その方法が同時に内容的意味をも有つことは否定できない。何故ならば、ハイデッガーに於いて所謂基礎的存在学の核心を成すものは人間存在であり、人間把握は人間存在の了解に依つて可能であり、そしてかかる人間存在の了解の方法が即ち解釈学的方法であると共に、この方法と相關的に人間存在は初めてハイデッガーの所謂「関心」として把握されるのである。

元来解釈学は文献解釈の方法であるが、哲学は屢々この解釈学的方法を深化拡大して人間存在乃至人間のなるものの活動及びその表現的所産を把握するための哲学的方法としようとするのである。けれども解釈学的方法はその起源に基いて矢張り文献解釈を基本としてゐる。併しながら言語は事象そのものではない。事象を指示するものとして言語は最も代表的であるが、併し「言語が事象を指示する」といふこと自身が既に明示してゐる通り、言語と事象とは決して同一のもの

ではない。同一のものの中には表現関係は成立することができず、表現関係が成立するためには却つて表現するものとされるものとの間には何等かの相違がなければならぬ。かくして我々は言語と事象との混同を十分警戒しなければならぬ。ハイデッガーはその著『存在と時間』の冒頭に於いて例へば *phainomenon* (現象) といふ言葉をギリシア語の語源に即して *phainesthai* から説明してゐる。けれども我々はこの説明をそのまま受取る前に *phainomenon* といふギリシア語と現象といふ事象とを一応區別する立場に立つて、この言葉が果してどの程度まで事象に適合してゐるかを十分吟味してみなければならぬ。ハイデッガーの説明が精緻巧妙であれば我々はその所説の妥当性について益々批判的でなければならぬ。このことは「現象」といふ我々自身の言葉に即して「現象」といふ事象を分析しようとする場合にも全く同様であることは勿論である。現象学の標語が「事象そのものへ」であることは周知の通りであるが、この現象学を *phainomenon* と *logos* といふ二つのギリシア語の結合語として説明する時——ハイデッガーはそれを試みてゐる——若し言語の巧妙な説明に眩惑されて事象そのものへの途を忘れるならば、そのやうな態度自身が反現象学的であると云はねばならない。例へば道徳といふ事象を捉へるために *ethos* といふギリシア語の分析を通ずる場合と道徳乃至倫理、人倫といふ如き言葉の分析を通ずる場合とは異なる意見に到達することは当然である。この異なる道徳把握はそれぞれ道徳の本質の或る一面を捉へてゐるのであるにしても、哲学はこのやうな一面的把握を超えて道徳といふ事象そのものを全面的乃至多面的に捉へるべく努力しなければならぬ。このやうなことは単語の解釈から進んで、文法的構造に依る存在把握の如きものに進むに従つて益々強調されなければならない。文法的構造が必ずしも直ちに思惟構造乃至存在構造と一致するものでなく、又必ずしも存在構造を完全に写すものでもないことは一般論としては恐らく容易に承認されることであらうが、文法的構造に依る説明が巧妙である場合には、それに対する批判は益々文法構造と思惟構造乃至存在構造との区別の明確な自覚を必要とするのである。解釈学的方法是——他のすべての方法がさうであるやうに——一面に或る種の長所を有つてゐると同時に、他面その長所そのものが短所となる場合のあることを知らねばならない。人間乃至人間

的生命の表現と了解とが主として言語を媒介とすることは事実であるが、言語は直ちに人間乃至人間の生命そのものでもなく、又その表現そのものと同一であるのでもない。言語が具体的に成立するためには種々なる歴史的社会的な条件があるのであり、従つて言語を媒介として表現・了解された人間乃至人間の生命及びその表現も亦歴史的・社会的に条件づけられてゐる。このやうに条件づけられた事象の条件づけられた把握に解釈学的方法が有力な方法とされることは当然である。けれども若しこの方法に依つて宛かもその条件を超えた事象の把握が可能であるかのやうに考へるならば、それは危険な誤解であると云はねばならない。

言語は本来一種の社会現象であるところから、社会的・歴史的な制約を免れることができない。ところが哲学は、それ自身又一種の社会現象として矢張り社会的・歴史的に制約される面があると共に、他方又このやうな制約を超えて対象的にも内容的にも又その理説の妥当の点からも普遍性を要求する面を有つてゐる。哲学がその表現の手段として現実に存在する特殊の言語を超えて云はば一種の普遍語 (lingua universalis) の如きものを要求するものこの点に由来すると云ふことができる。近世既にデカルト及びライブニッツに mathesis universalis (普遍数学) の思想があり、ライブニッツはその所謂 ars combinatoria (結合術) characteristica universalis (普遍記号) calculus ratiocinator (推理計算) の建設を企図したが、これは言語の有つ如上の制約を超えるものとして若干の記号とその数学的計算とに依つて思想の運行及び表現の手段としようとしたものにはかならない。この思想は十九世紀末から所謂「論理代数学」(algebra of logic) の思想を経て「論理計算学」(logistic) の建設を見るに到つた。勿論これは言語理論ではなく一つの新しい論理学説であるが、その意図には現実の諸特殊の言語に代へるに数学的記号を以てしようとするものが含まれてゐるのであり、これを裏から換言すれば、新しく一種の普遍語乃至理想語の建設を企図するものと云ふことができる。この運動は所謂 Wiener Kreis (ウィーン学団) 乃至 Vienna-Chicago-circle (ウィーン・シカゴ学団) の運動として、物理学的実証主義と結合して、論理の実証主義といふ名を以て呼ばれる一種の哲学的運動となり、ヨーロッパの各地及びアメリカに盛んに唱導され

るやうになつた。けれどもこの派の人々が、假令屢々言語といふ言葉の口にするにしても、その所謂言語とは一般に所謂言語即ち特殊の言語のことではなく、彼等の意図する理想的言語乃至普遍的言語のことなのである。併しかかる記号的なものを以て果して全く言語に代へることができらうか。現に我々がその記号を「読む」時には何等かの特殊の言語に翻譯して読むことを全く免れることができるであらうか。等々といふ点については種々論議の余地のあることである。のみならず、假令かかる記号を以て言語に置き代へることができるとしても、それに依つてどの程度に精確化と簡單化とが期待されるかといふ点についても多くの論議のあり得るところである。けれどもこの点は今措くこととして、かかる理想語の如きものは今直接此所に主題とする「言語と哲学」に於ける言語の範囲からは逸脱するものと云はねばならないであらう。

擬言語の哲学に対する關係は上來見て来たやうに表現及び了解の手段といふ意味を有つと同時に、単に手段たるのみならず更に哲学の内容に關与する性格をも有つてゐる。ところで言語は更に又哲学の研究対象となることに依つて哲学の内容となる意味を有つのである。所謂言語哲学なる部門は即ちそれである。言語が断片的に哲学の問題とされたことは古代ギリシア以來屢々見られることであるが、特に言語哲学と云ひ得る如きものは現はれたのは近世に於いてである。勿論近世に於いても多くの哲学者がこの問題に觸れてゐるのであるが、比較的まとまつた論述としてはロックを挙げる事ができる。或る哲学史家はロックの名著「人間悟性論」の第三章を以て近世に於ける言語哲学の最初の試みであるとしてゐる。けれども特に言語の問題が採り上げられたのは略々十九世紀以後のことであると云はねばならない。ヘルデル、フンボルト等に初まりヴント、シュタインタール、マルティ、フォスラー、クローチエ等々の研究は即ちそれである。勿論この事實は十九世紀に於ける言語学の勃興と相伴ふ事柄であり、所謂言語哲学の歴史を辿つてみても、十九世紀前半に於けるそれは実証科学としての言語学と未分化の状態にあるものであつた。十九世紀の後半以後種々の実証科学がそれぞれ一科の特殊科学として哲学から分離し独立するに到つては、言語学そのものが一科の特殊科学を形成すると共に、諸々の特殊科



学がそれぞれ独自の立場から言語をその研究対象として、言語心理学、言語社会学等の部門が成立するに到つた。それ故例へばフンボルトの言語研究等に溯れば、それは言語哲学の端緒であると同時に言語学の発端でもあると云ふことができる。言語哲学及び言語学の歴史については勿論今改めて詳述する必要はない。今問題となるのは言語哲学が特にその対象とする言語とは何であるかということである。

現実存在する——或は存在した——言語が各々特殊の言語であることは云ふまでもない。それ故特殊科学としての言語学及び言語語に関する諸特殊科学の実証的研究がかかる現実的な諸言語をその対象とすることは当然である。けれども諸言語のそれぞれが何れも齊しく言語と呼ばれ得るためには、諸言語が共に言語と呼ばれ得る所以のものがあつてある筈である。そのためには「言語そのもの」と云ふべきものの本質が存在するのでなければならぬ。逆に又、諸言語の各々は言語そのものの本質を分有してゐるのでなければならぬ。各言語に関する特殊科学の実証的研究は各々特定の言語の範囲内に於いてその研究の対象を求めるのであるが、理論的にはその研究は言語そのものの把握を前提としてゐる。言語哲学はまさにこの言語そのものの本質を自覺的に把握しなければならぬ。この意味に於いて言語哲学の対象は「言語そのもの」であると言はれるのである。

けれどもかかる言語そのものは現実にある諸言語を離れてそのほかに一つの言語或は一つの語族として存在するものではない。現実存在するのは言語そのものではなくして飽くまでも特定の諸言語である。といふことは逆に、現実存在する特定の諸言語は直ちに言語そのものであるのではないといふことである。併しそれならば哲学の任務は既に存在する諸言語のほかに理想語乃至普通語の如きものを創造することであらうか。既に向にも触れた通り、論理計算学の如きはこゝのやうなもの企図を含んでゐたとも云ふことができる。けれどもこの運動は実は言語の記号化を意図するものであり、その意味ではむしろ言語否定の運動であると云ふことができる。併し又言語哲学の任務は人工語乃至国際語、例へばエスペラントの如きものを組織するにあるのではない。このやうな言語は若しそれが現実に行はれるに到るならば、やがてそ

れ自身又諸言語の一つとなることは言語の本性上当然の結果であると思はれる。言語哲学の任務は元來現実的言語の建設にあるのではない。言語哲学の任務は現に存在する言語を通じて言語そのものの本質を捉へることである。即ち云はば特殊の中に普遍を捉へることである。特殊科学は特殊を特殊として捉へるべきであり、仮令言語についての一般法則を樹立するにしても、それは飽くまでも特殊と特殊とを比較する帰納的方法に依る実証的研究でなければならず、従つてその所謂一般法則も特殊の性格を脱するものでない。若しこのような研究が言語そのものの本質に觸れて来るならば、特殊的研究はおのづから哲学的研究へ移行すると云ふべきである。

言語哲学の任務は諸言語の実証的研究それ自身であるのではなく、又理想的普遍語の如きものを建設することでもなく、又人工的國際語の如きものを組織することでもない。現実存在する諸言語が何れも齊しく言語と云はれる所以のもの、即ち云はば言語そのものの本質——言語そのものの生成、構造、活動等——を明らかにすることが言語哲学の任務でなければならぬ。言語哲学はその發生の初期に於いて言語学的研究及び言語に関する諸特殊科学的研究をも一身に引受けなければならなかつたが、それは學問の未分化の事情の故に不可避的なことであつた。と同時に又言語哲学はその初期に於いて屢々単に思弁的・独断的であつたが、このことは科学の実証的研究のなほ未だ確立されなかつた当時の状態に照して止むを得ないことであつた。けれども今日は事情は異なつてゐる。特殊科学としての言語学及び言語に関する諸特殊科学の確立、或は少くともその覺醒に依つて、一方に於いては所謂哲学の独断的・思弁的思索がその意味を疑はれると同時に、他方言語の研究は特殊科学に依る実証的研究に限られるやうに考へられ、その結果として言語哲学の領域は往々既に失はれたと考へられるのである。成程言語哲学が言語の特殊的・実証的研究から遊離する限りに於いてはこの考へは正しいと云ふべきであらう。けれども今日言語哲学は、言語そのものの本質を捉へようとする意図を、言語に関する特殊科学的実証研究との媒介に於いて実現しようとしてゐる。言語哲学は一方直接に現実的諸言語の特殊の中に言語そのものの普遍を見ようとすると同時に、他方諸言語に関する諸々の実証的研究の特殊を媒介として普遍を捉へようとする。勿論哲

学者が材料とする言語及び言語に関する実証的研究には制限がある。その制限を可能なる限り取除いて材料の範囲をできるだけ拡大しようとすることは哲学者にとつて必要な努力であるが、併し哲学者は必ずしもポリグロットたることを不可欠の条件とするものではない。それよりも一層大切な条件は特殊の中に普遍を看取する力である。この力を具へた哲学者が、一方で例へば印欧語系の言語及び言語研究を通じて或る種の言語哲学を樹立し、他方では日本語及び日本語の研究を媒介として別の種類の言語哲学を建設することが必要であり、その上でこれら諸々の言語哲学が互に対決し相互に媒介し合ふことに依つて始めて眞の言語哲学の發展は可能となるのである。

哲学の現状、特に各特殊科学との限界領域に於ける状況については、語るべきことが余りに多いと同時に、又語るべきことが余りに少い。このことは言語哲学の分解についても亦同様であり、或はむしろ特にさうである。言語哲学が言語学及び諸言語科学との交渉に於いてどのやうに發展すべきかについては多くの論ずることがあるであらうが、併しその實際の業績については今日語るべきことはなほ甚だ少ない。このことは言語哲学の新しい構想が実はなほ若く、言語哲学が交渉すべき言語学及び諸言語科学さへなほ未だ比較的若いといふことと、更に加へて言語といふ事象が甚だ複雑な性格を有つてゐることに由るのである。かく言語はそれ自体複雑な事象であるが、なほその上に諸文化体系即ち科学芸術等々に対してのみならず哲学そのものの中に於いて特殊の位置を占めるものである。言語は人間の生むものであるが、それは単に道具や機械のやうには作られるものでない。言語は深く人間の生命に根差し、それと云はば癒着してゐる。言語は一面に於いて合理性を有しながら——合理性を有するからこそ文法組織が可能であり、それに即して論理学すら展開することができる——、他面深く非合理的なものを蔵してゐることは、言語を生む母胎たる生命そのものの性格に由来することである。言語を簡単に道具視して、これを専ら便宜と合理との故に随意に「改良」しようとするやうな企てが却つて言語の混乱を惹き起す結果になるのは、言語が生命からの自然発生的所産として深く非合理的なものを有つてゐる面のある事実を無視するためである。言語の「改良」はそれを生む生命そのものの「改良」を度外視しては根本的には不可能なのであ

る。このやうに深く人間的生命と癒着する言語が、一般に生命の表現的所産としての諸文化体系の中で或る独自の位置を占めることは当然でなければならぬ。即ち言語はその独自性に基いて、生命の表現的所産の中で最も根本的、基礎的な位置を占めると云つて宜いであらう。現にカッシーラーの如きがその所謂象徴的形式の哲学を言語の考察から始め、又最も根源的な徴象形式である神話の考察を特に言語と結びつけて行つてゐるのはこのためであると云ふべきであらう。

言語哲学は上述のやうにして、哲学体系の中に於いて独特の位置を占めるものであるが、このことは又言語哲学自身が言語に依つて自己を自覚し表現するといふことも聯関してゐる。哲学は元來事象の知識的自覚であるが、知識的自覚にとつて又言語は重要な媒介である。哲学は最も広い意味でロゴスの自覚であると云ふことができるが、この時ロゴスとはギリシア語の語義に基いて理性的であると同時に又言語的でもある。それ故言語の哲学的自覚——それは言語哲学である——はそれ自身言語を媒介として行はれる。従つて言語哲学に於いて言語は言語に依つて言語的に自覚される。換言すれば、言語哲学は言語そのものの言語的自覚であると云ふことができる。ところでこのやうに云ふと或は、言語哲学は言語的。哲学でなければならず、言語的哲学とは向に触れた解釈学的方法に依る哲学、乃至端的には解釈学的。哲学でなければならぬと考へられるかも知れない。けれども、若し明らかに解釈学的。言語哲学と云はれ得る如きものが構成されるとするならば、そのやうな言語哲学は多くの言語哲学に於ける一つの場合であつて、唯一の言語哲学たる権利を有つものではない。言語哲学は哲学そのものがさうであるやうに、可能なる限り多くの方法を用ゐて、事象を可能なる限り広く且つ多面的に見なければならぬ。言語哲学が言語を言語的に自覚するといふことは言語は必ず右の意味で言語的。哲学でなければならぬといふことを意味するものではない。言語哲学は言語を言語的に自覚するといふ場合の「言語的」とは単に文献解釈の方法乃至その拡大ではなくして、言語を媒介としつつ而も言語を超えて事象に迫る方法を有たなければならぬ。言語哲学の對象たる言語は個々の特殊の言語ではなくして「言語そのもの」でなければならぬが、この「言語そのもの」は特殊の諸言語に於いて而も特殊の言語を方法として把握されるのでなければならぬ。けれども哲学はこの意味の方法

としての特殊的言語を超えて「言語そのもの」といふ事象に迫る方法を有たねばならない。更に又かくして捉へられた「言語そのもの」に関する敘述の方法としての言語も、単にその特殊性を超えて普遍的意味を有たなければならぬ。

このことは単に言語哲学のみならず哲学一般に当嵌まることである。畢竟言語は哲学にとつて重要にして特殊な且つ不可欠な関係を有つものである。然もそれにも拘らず哲学は単に言語に止まるのでなく言語を超えるものを要求せざるを得ない。それは如何にして可能であるか。此所に於いて我々はおのづから哲学の根本問題に触れ、同時に今私に与へられた課題の範囲を超えざるを得ないのである。